

井口：アメリカ生活が長いと日米の文化や習慣が自然と身に付いているので、自分自身は意識していない。親は心配しているかもしれないが、補習校の生徒たちも柔軟に対応して自然と周りに溶け込んでいるはず。アメリカは多様性の社会なので、受け入れ態勢も整っている。赴任で子供たちを連れて渡米した際は、英語の習得やスポーツなどの課外活動を通して多くの人や文化に触れることを優先した。



子供たちが担う役割について 考えさせられる場面も

小林：子供たちは普段いろいろな価値観の人と交流し、異文化での生活に慣れている。日本語学校に来ている生徒たちのコミュニケーション能力は高い。日本にルーツを持つ子供たち一人ひとりが日本のアンバサダーであるという意識を持って情報発信していただきたい。

時代の変化と求められる人材について

吉村：日米ともにリーダーシップは重要視されるが、日本の教育制度を経験するだけではリーダーシップを発揮しにくい。一方で、最近のアメリカではリーダーに共感指数（EQ: Emotional Quotient）の高さが求められる。日本で育てば自然に考えられることだが、いかに部下の感情に寄り添えるかをアメリカのビジネススクールでは学んでいる。

小林：日本人が携わる部門は優秀で評判が高い。組織の中では、リーダーでもフォロワーでもチームプレイヤーとしていろいろな役割がある。自分らしさをアドバンテージと捉え、貢献できる場所を見つけられればよい。

井口：最近ではコミュニケーション能力の高い人材が求められている。異文化コミュニケーションでの経験が、個人を尊重したりチームワークを大切にしたりするバランスをとる力を育むことに結びつく。また、アメリカでディスカッション形式の教育を受けていることは、非常に役に立つ。



時代を拓くグローバル人材 として補習校の生徒に期待！

在校生へのメッセージ

吉村：ダイバーシティの真の意味は、相手を思いやれること。日本語ができる国際人は、まさに日系企業が求めている人材。いろいろな国の人と接し、日本語や日本への理解を持つという標準装備を整えて頑張ってもらいたい。

井口：アメリカで多様な文化を経験する子供たちの可能性は無限大。もっと自信を持ってよい。どこに居ても日本人としてのアイデンティティを大切に、日本のことを世界に発信する意識を持ってもらいたい。

小林：子供が大学進学時のエッセイで、「私はアメリカ人と日本人の『ハーフ』ではなく『ダブル』だ」と書いていた。両方経験できて得しているという気持ちが大切。保護者は子供たちを日本だけでなく、日米や世界の宝として褒めて応援してあげてほしい。

会場からは終了ギリギリまでパネリストへの質問が寄せられるなど、保護者の関心の高さがうかがえました。最後に、参加した保護者から届いた感想をご紹介します。

アメリカの地で、日本の言語だけでなく、文化や考え方も学べるのは、塾ではできない経験だと改めて思いました。

補習校の良い点は、自分の親以外に他の日本人家庭の価値観に触れられることだと思います。

異文化コミュニケーションを普通に体得している補習校の子供たちは、実社会で求められているスキルを持っている、という点に勇気づけられました。